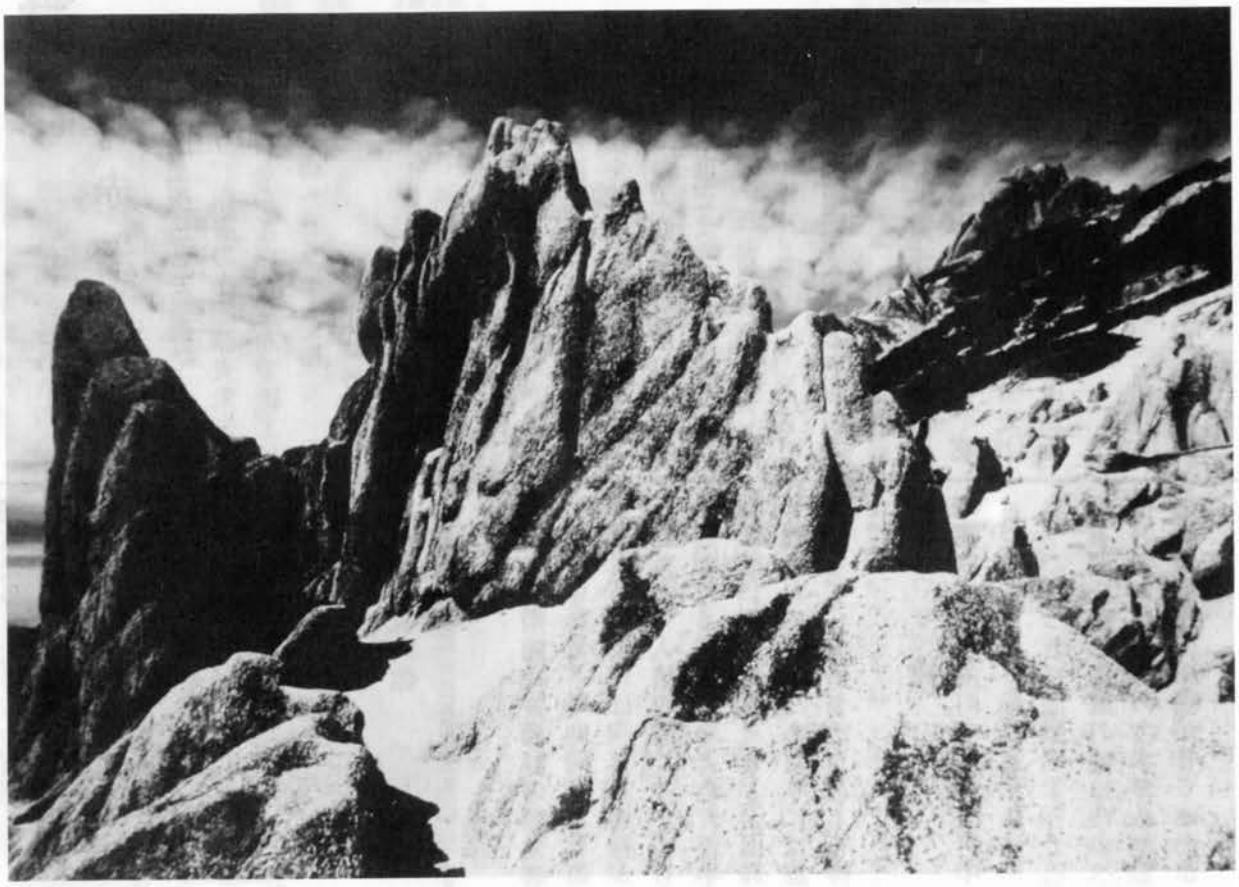
山と博物館

第36巻　第4号　1991年4月25日　　大町山岳博物館

特集　『燕岳と安曇野』　－赤沼淳夫写真展－　4/21～5/12



燕岳の印象　撮影　赤沼　淳夫

写真展開催にあたって

赤沼　淳夫

燕岳（つばくろだけ）（二七六三m）は、つばめが羽を広げた姿に似ているところから名付けられたと言われております。父が大正十年に燕山荘（えんざん）の前身である〝燕の小屋〟を建ててから、私は幼少の頃より燕岳をわが山のようにして育ってきました。

今年は創立七十周年に当りますので、記念事業として写真集〝燕岳と安曇野〟を出版いたしました。

このたび大町山岳博物館のご好意により、写真集の中から約六十点を選抜して作品展を開催させて頂くことになりました。

父は生前、安曇野は世界一素晴らしいところだと言っては人を笑わせたものですが、北アルプスをバックに四季の移ろいの素晴らしいこと、清冽な流れ、きめ細かな叙情豊かな風景等、トータルに見た場合、父の言葉がよく分かるような気がいたします。

その安曇野にも、目下開発という名の変容が急ピッチで起こりつつあります。

レンズを通して無垢な自然の姿を、ひたすら追い求め続けてきた年月を振り返るにつけ、このかけがえのない自然をいつまでも守り、後世に伝えたいと切に願う昨今です。

これらの作品は十数年にわたり撮り続けた作品の中から選んだものです。御高覧賜わりますれば幸甚です。

燕岳と安曇野

赤沼淳夫

写真展『燕岳と安曇野』の開催にあたり、作者の赤沼淳夫先生に出品作品から九点を選んで紙上にてご紹介いただきました。

（山岳博物館）

岩と槍と

眼前の岩

岩と槍と　燕岳

HASSELBLAD 500/M PLANAR 120mm F 4 f 22 1/8 sec.

燕岳の面白さは、岩の表情が色々の動物を連想させてくれる。この岩はイルカ岩とも呼ばれて、見れば見るほどそっくりである。

眼前（まかない）の岩

LINHOF TECHNIKA 70 SYMMAR 100mm F 4 f 16 1/8 sec.

高瀬谷はよほど幸運でないと、このような雲海に恵まれない。雲海をバックに岩を引き立たせた。岩の形が切り紙細工を思わせ、面白い写真となった。

薄氷光る　大町市中綱湖

HASSELBLAD 500/M PLANAR 120mm F 4 f 22 1/15 sec.

中綱湖は仁科三湖のうちでも写真的素材に大変恵まれていて、私の好きな撮影地でもある。自然の造形は時に芸術でさえあると思うことがしばしばである。

霧氷碌山美術館

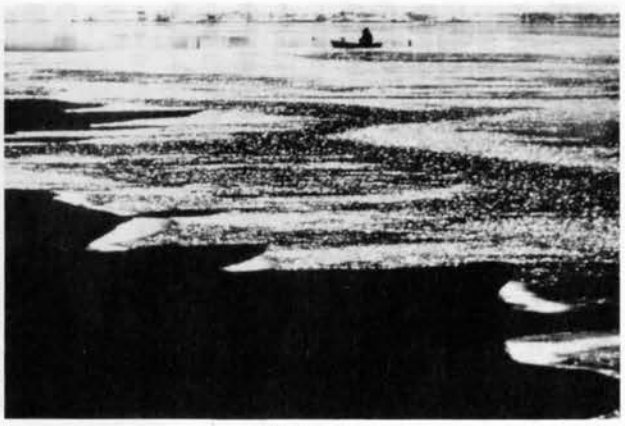
LINHOF TECHNIKA 70 SYMMAR 100mm F 5.6 f 11 1/30 sec.

碌山美術館は安曇野の観光名所となっていて、年間何十万もの人が訪れる。これは内容と建物が両相俟って人気を博しているものと思われる。ある冷え込んだ早朝美術館に行ってみると、全面霧氷に覆われていて、あたりには誰一人おらず、徐（おもむろ）にシャッターを押した。

辛夷（こぶし）咲く　穂高町有明　五月中旬

HASSELBLAD 500/M SONNAR 250mm F 6 f 22 1/15 sec.

有明山麓の田圃の畦にたいへん格好のよい辛夷の古木があって、毎年見事な花を咲かせていたが、



薄氷光る

霧氷碌山美術館

奇岩雪化粧

初冬　燕岳

奇岩雪化粧　燕岳頂上附近の岩場
HASSELBLAD 500/M PLANAR 80mm F 2.8 f 22 1/8 sec.

燕岳は風化した花崗岩がいたるところに屹立して、写真的モチーフに大変恵まれている。十月下旬～十一月上旬の弱い寒冷前線が通過したあと、うっすらと新雪の被った岩は絶好の被写体である。

初冬　燕岳　燕岳への登山道にて
HASSELBLAD 500/M PLANAR 120mm F 4 f 22 1/8 sec.

十一月下旬の小雨の中、明日の快晴と新雪を予期して燕岳に登った。翌朝は一面の濃霧で期待を裏切られたが、頂上に近づくにつれ晴れあがり、ガスに煙る山頂の写真はこの一枚だけであった。

染まる岩肌　燕岳頂上の岩場にて
HASSELBLAD 500/M PLANAR 120mm F 4 f 22 1/8 sec.

前々から狙っていた岩である。今までに何回撮ったことか。新雪の舞った夕刻、ガスが湧き上がり、バックの山肌が単純化されたのが幸いした。残照も見事であった。

或る日突然姿を消してしまったのに気付いた。聞いてみると構造改善とかで持ち去られたとのこと。今ではあたり一面幾何学的な田圃となっていて、何の風情もない。

朝霧のワサビ園
HASSELBLAD 500/M DISTAGON 50mm F 4 f 11 1/8 sec.

穂高町大王ワサビ田　十月下旬

穂高町大王ワサビ田は、スケールの広大なのが魅力となって沢山の観光客の人気の的となっている。六月～十月にかけて日除けが張られ景観は半減するものの、写真の撮りようによっては造形的な面白さもある。

染まる岩肌

朝霧のワサビ園

辛夷咲く

赤沼淳夫先生
日本山岳写真協会松本支部長
燕山荘・大天井ヒュッテ・ヒュッテ大槍
アルペンホルン（栂池）経営
長野県南安曇郡穂高町在住

丸太小屋造りの名人と相識って

谷口　現吉

私が大町に住むようになって若いすぐれた友人が何人もできた。その中の一人が丸太小屋造りの名人平林定男君である。彼は大町市の隣、美麻村の電燈もなにもない無人の山中にかなり広い土地を持ち、そこで無雪期にログビルダースクールを主催している。

十坪ほどの天幕二張りを設け、一つは食堂、炊事場兼集会所に当て、他の一張りは教室にしている。他に小さな客用の小屋が一棟、二～三人用小テント数張りが生徒の宿舎として用意されている。そこから二十歩ばかり斜面を登ると木の間越しに木崎湖を見おろし、その向うに後立山連山を一望できる小さな素晴らしい展望エリアがある。

入校希望者があれば随時一人でも受けつける。三泊四日を一サイクルとして、丸太小屋造りの基本と彼独特のチェーンソーの操作を教える。生徒の大半は郷土に帰って自分の小屋造りを始める。行き詰まったり疑問が出ると、またここに戻って来て教えを受ける。今年で十三年目、一三〇〇人の生徒が全国に散在している。彼自身の作品の一つがここから六、七〇〇m離れて、鹿島槍に正対した素晴らしいところに一棟ある。また木崎湖の東端のなだらかな丘陵上に私の親しい友人の小屋を建設中で、新緑の頃には完成する。

木崎湖を望む大町市海の口の現場にて

彼は山菜、薬草、茸などについて実践的な広く深い知識を持っていて、彼のゲストハウスに泊まってご馳走になる山菜や茸の多彩さと豊富さとそのおいしさはまさに天下一品と言うべきである。またその知識と造詣の深さは何時の間にか人にも知られ、乞われて大学に講義に行くこともあるらしい。

唐松は最も成長の早い建築用材として戦後大いに植林が奨励されたのだそうだが、ようやく中径木以上に成長した今日では不適材として省みるものが少ない。ところが平林工法による丸太小屋造りには適材であると言う。しかも彼は伐材後長く乾燥してからでないと用材として使えないというのではない。伐り倒してすぐ切り口の年輪を見据えて、そのよじれ、ねじれを適確に予測してすぐに組み立てを開始できる。ねじれ、よじれを適確に予測できれば、それを逆用して相互の締めつけに活用するのだと言う。これこそ他の追随を許さぬ全く彼の独壇場なのである。

彼はまた日本古来の宮大工こそ世界一の木工技術であるとして心から敬慕憧憬していて熱っぽく私に語るのだが、残念ながら門外漢の私にはその真髄は理解できない。しかし彼と相識るようになってから三年余り、彼から得た多くの知見を私なりに次のようにまとめてみた。大方のご批判を仰ぎたいと思うのである。

我が国の植林帯にはそれを囲むいわゆる薪炭林等の雑木帯が広くある。植林帯の営緑樹はそれなりに気高い風格が素晴らしいが、我々に四季の美しい変化を訴える力には乏しい。それにひきかえ雑木林は新緑、紅葉など極めて鮮かな変化があって、我々に四季を訴える力が極めて強い。まして木枯しに吹かれてすべての葉が落ちつくすと、思いもかけないドラマがそこに出現する。雪をまとった遠くの山嶺がその勇姿を現わすからだ。雑木林こそ四季の変化を端的に我々に訴えて人々を喜ばせる要素が多い。

和歌山での作品

この美しい変化に富む雑木林帯の中に近くの植林帯の間伐材を活用して、それにふさわしい木造の家屋を建てる。その最たるものが、このログハウスだと言えよう。唐松の植林帯一・五ヘクタールの間伐材で二十坪近いログハウスが建てられると聞いている。

自然を損うこと最も少なく、都会人士がその中にどっぷりつかることのできる方途として、これほどふさわしいものは他には求められないのではなかろうか。

（山岳博物館顧問・日本山岳会名誉会員）

博物館だより

4月と5月の特別展ご案内

○燕岳と安曇野―赤沼淳夫写真展―

4月21日(日)～5月12日(日)　講堂・教室で

○春の草花と山菜展

5月25日(土)～5月29日(水)　講堂で

野草・山菜の鉢植え、生け花などを展示。

（両特別展とも無料）

人事異動

4月1日付で藤巻孝之主事が産業建設部農政課農村整備係に転任、清水博文学芸員が新規採用されました。また4月4日付で臨時職員として北沢栄子さんが勤務されました。

山と博物館第36巻第4号

一九九一年四月二十五日発行

発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一　大町山岳博物館

印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部

定価　年額一、一三〇円（送料共）（切手不可）

郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）